



新橋演舞場で上演中の石川耕士作、中川寿夫演出の「恋らんまん」は、豊臣秀頼とその妻千姫の夫婦愛をつづったドラマで大地真央と中村橋之助の主演。

史実では大坂城落城と共に戦死した秀頼が、実は生き延びていたという大胆な設定のもとに、秀頼に変わらぬ愛をささげた千姫の姿を描いている。いわば歌舞伎のように趣向本位の芝居で真央の千姫が見せる七変化が見どころになっている。最初



チェリストで作曲家の平井文一朗「写真左」が演奏活動四十周年を記念するリサイタルを開く(25日7時、東京文化会館)。第二十三回日本音楽コンクールに優勝した年から起算しての四十年だが「もっとも印象に残っているのは、師のカザルス先生が私のリサイタルのために来日してオーケストラの指揮を務めてくださったこと(一九六一年)です。他のだれにもカザルス先生はそんなことをしたことの趣向は、徳川家の娘という理由で遠ざけられた千姫が、夫のため自ら料理を作る台所千姫。次が二条城で家康と対面することになった秀頼のため、男姿でつきそう男装千姫「写真左、右は橋之助。このほか城を忍び出た二人が出雲の

阿国一座にまじって歌い踊ったのパロディで、千姫が遊女姿になり、歌舞伎役者の姿になって城からの脱出を試みたりシーンもある。最後は伝説の吉田御殿歌劇退団以来ほとんど初めて「だそうだが、その場面になると客席の真央ファンから大きな拍手がわいている。ほかに新珠三代、内田朝雄、萩原流行、土田早苗などが出ているが、大地真央ショーのような印象の舞台である。

大地真央ショー



まだに楽譜を見るたびに新しい発見がある。結局カザルス先生はバッハの発見のしかたを教えてくださいましたのかもしれません」。リサイタルでは自作の「クラシカル・ソナタ」を初演する。「古典的な形式で現代の感情を表そうと挑戦しました」

親子リサイタル



を取り上げる。

「バッハについてカザルス先生から教えていただいたことは体に刻み込まれています。いと笑顔が浮かんだ。

「バッハについてカザルス先生から教えていただいたことは体に刻み込まれています。いと笑顔が浮かんだ。

「バッハについてカザルス先生から教えていただいたことは体に刻み込まれています。いと笑顔が浮かんだ。



三島の「最後の見つけたソノ」

今年も三島由紀夫が自害した11月25日が近づいた。あれから24年。埼玉県久喜市の「リサイクルショップ加納」で三島由紀夫の「最後の絶叫」と題する週刊サンケイ別冊付録のソノシートを見つけた。市ヶ谷・自衛隊総監室バルコニーでの割腹前の演説である。

野次と怒号に打ち消されながらも、三島の最期の肉声は激情に充ち悲壯だ。「自衛隊が20年間、血と涙で待った憲法改正というものの機会がないんだよ。(中略)今ここで日本人が立ち上がらなければ憲法改正はないんだよ。諸君は永久にだねえ、アメリカの軍隊になってしまうんだぞ!」「ば

ところで三島の声は聞こえなくなり、「おい、おりろ」という罵声と共にソノシートは終わっている。

映像でもわずかな断片しか残されていない三島の自害の日を、声で伝えた貴重な記録である。

昭和40年代の中ごろまで、雑誌や週刊誌の付録にソノシートが付いてくることがあった。薄っぺらのプラスチックでできたソノシートが、今思えばすごい内容で「記録」としての「レコード」的価値をもっていたと思う。演説・朗読・ルポルターージュといった内容のソノシートは、中古盤店よりも、むしろリサイクルショップや古本屋などに